

○ストレス解消の必要性

心理的リアクタンс・カリギュラ効果は必要にして存在している現象です。心理的リアクタンс カリギュラ効果は指示や命令に反する行動をとることです。その行為の原動力は、指示命令へのフラストレーションを解消することだと言われています。

リアクタンсを行う子どもはストレスを解消しているということになります。逆にリアクタンсやカリギュラ効果のような反抗ができない子ども、また指示命令を出す側に立てない子どもはストレスを解消できずにため続ける可能性があります。

別項目 25 指示増で意欲が下がる に詳細がある  
子どもの個性は様々です。

項目43の項目では  
集団活動をした時の子どもたちの様子を分類しています  
子どもの中には集団の中でリーダーになることが苦手  
反発することも苦手で、人との関わりが得意でない子どもが存在します。

これは不登校傾向の子どもに聞き取りをして、最大公約的にまとめた「仮想モデルSL」を見ていただきたいです。

別項目85モデルSL参照

また人との関わり能力は訓練で急激に向上は難しいです。  
自閉症に訓練を施して短期間で改善するのは困難です。  
人とかかわるのが苦手な子どもには、全体的な活動を増やさず、リラックス時間を存分にとる必要があります。集団になると、その中には自閉的な要素がある子どもやモデルSLに近い性質を持つ子どもは存在します。教師にとっては、モデルSLのような反発しない子どもは視界から外れがちです。

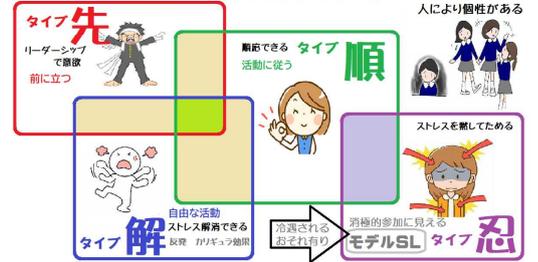
○ストレスを溜めない子ども

反発する子どもは、ストレスを貯めません。  
逆に反発できない子どもこそ、ストレスを貯め続け、重大なリタイアになる可能性が多いと思われます。

そのモデルSLのような子どもがリタイアするのを避けるため、過度な活動、提出物には検討が必要だと思われます。

事実 ここ数十年、授業時間以外の活動、そして提出物やテストの頻度は膨大に増え続けています。半面、通常教室に入れない子どもたちも増え続けています。学校に来れない教師も増え続けています。全員に授業をする、という大前提の実施が困難となっています。  
特に義務教育の小中学校では「全ての子どもに授業で教育を授ける」という目的を大事にするべき時なのではないでしょうか。

変化がある集団活動(集団行事等)を行った場合



モデルSLの学校での**ストレス**

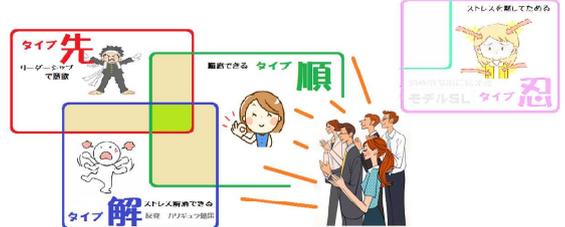
- 人との関わりが過剰になる
- 変更が増え、自分の見通しが崩れる
- 先生や生徒からの指示が増える
- リラックスのリズムが崩れる
- 提出物や活動が飽和状態になる

自分のペースで生活できない  
行事が立て込むと断続的に起こる・・・

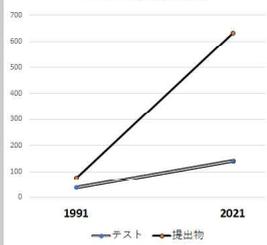


活躍、反発、活動する子供は  
ストレス解消して活躍が目立つ

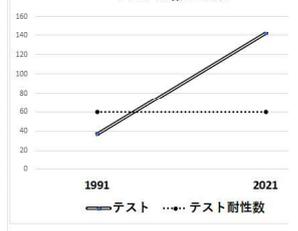
ストレスを溜めた  
子どもは目立たない



テストと提出物の増加



テストの増大と耐性



(指示) 命令する側になれば  
意欲向上↑



心理的リアクタンс=指示による意欲減退



人との関わりが苦手、自閉要素がある場合さらに低下する可能性  
指示する側になるのも苦手

改めて学校などで行う子どもの集団での活動を考えてみましょう。集団でリーダーになる子どもは一部です。またリーダーになることが苦手な子どももいます。

「全員がリーダーに成る」という目標を掲げた学校・学級を過去に見たことがあります。現実的に考えてみます。子どもの中には、人にかかわる、集団のリーダーになる、という事が苦手で大きなストレスになる子どもも存在するのです。

集団活動では、その中で先導する、つまりリーダーになる役割が必要になります。リーダーは活動を集団で進めるために指示命令を出します。指示命令を受ければ、反発行動を起こす子どももいます。ストレス解消という側面から見れば、反発行動を起こしている子どもはフラストレーションを解消しています。

集団行動を仕組む教員にとっては、面倒な子どもと受け取られるでしょうが、ストレス解消ができていいる存在でもあるのです。この場合、最も課題になるのは「タイプ忍」です。不登校傾向の分析で、不登校になりやすい性質を持つ「仮想モデルSL」という人格を構成しました。この「タイプ忍」はモデルSLに近い存在だと思われます。リーダーに成るのも苦手、人のとかがわりも苦手、自分のペースを乱されるのも苦手な反発もしません。反発する「タイプ解」よりもこの「モデルSL」に近い子どもを注視していくべきでしょう。このモデルSLは自分の能力を超える指示や活動も困ります。困難な課題を与えられても、いい加減な活動をしたくないのです。しっかり課題を行う性質上、他の子どもよりできる限界が低い可能性があります。能力を超えた提出物や課題を与えるのは避けるべきでしょう。

#### ○子どもの許容範囲を超えた活動

別項目で要支援の子どもが耐えられるテストの頻度を割り出したことがありました。もうすでに現在の学校では一部の生徒が耐えられるテストの頻度や提出物の量を超えている可能性があります。特にモデルSLのように手抜きができない子どもは、行き詰ってしまいます。モデルSLのような子どもは、全体では一部でしょう。しかし全体の中には存在します。

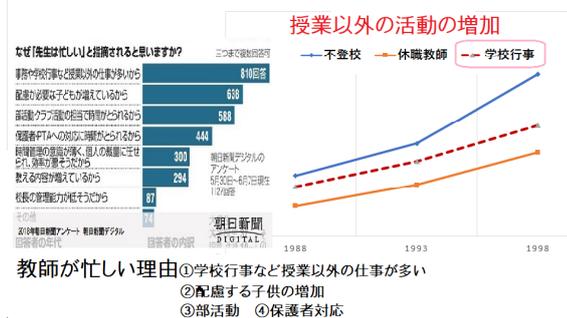
学校は全員に授業で教育を授ける場所です。授業は大切にすべきです。ですが集団活動や提出物は個人によっては、手に余るようです。集団活動の場合は、個人が参加を選択できる選択制にしていく事も検討すべきと思われます。また提出物についても、全員が一律の課題を達成することに無理があります。個人が習熟度に合わせて選択できる形にしていく事を検討すべきだと思われます。

END

## 個別対応の必要性

全員が一律の基準で行う事の難しさ

集団活動  
課題や提出物  
目標 活動量



### 不登校傾向の対応策

- 1 授業以外の活動を削減して生徒が授業に集中できる課程にしていく。
- 2 授業以外の活動を選択制にしていく。
- 3 集団活動を個に応じた活動にしていく。